

# 教 仁 名 聞

第 98 号  
(発行日)

2018 年 11 月 1 日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒 6638113 西宮市  
甲子園口 2 丁目 7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始。
  - 〈念仏座談会〉  
毎月 12 日 午後 3 時始
  - 〈聞名の会〉(法話・座談)  
毎月 6 日 午後 7 時始。
  - 〈真宗入門講座〉  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始。
- \* 8 月は 2 日の念仏座談会と 6 日の聖典学習会以外は休み。

## 多田鼎師の回心

十月七日、早朝大阪駅から湖北線ではなく、米原周りに乗り、無事福井駅に着いた。

台風二十五号は日本海の北を通過していったのでその影響で JR が不通になるのを心配したのである。北陸方面に行く湖北線は風や雪に弱く、運転中止になりやすいのである。

目的の安居寺は駅からは近い。安居寺での報恩講に香樹院徳龍師の話に依頼されて来たのであった。報恩講と前々住の山本龍音師(他二人)の年回法要を兼ねての行事で、三十名ほどのお参りがあつた。初めてお会いする方々が多い。私も勤行に参加するのが本来であるが、なにしろ体力がないので、法話まで体を休ませて頂いた。

参加された方々は熱心な方ばかりで、法話の後の質疑も充実していた。  
A さんからは「私は死後は別に問題ではない。ただ現在の居り場(抛り処)をハッキリ

りさせたい」との発言があり、また B さんからは「十八願は念仏往生の願ですが、また至心信樂の願ともいわれます。どうしてですか」というような専門的な質問もあつた。

控え室で休んでいた時、座っている背後の屏風に表装されている多田鼎先生のお手紙を読んでみると、非常に面白い内容であつた。

この手紙は山本龍音師に宛てられたもので、多田先生のお手紙の中で殊に重要なものを表装されたのだと伺う。

山本師は多田先生のご教化に会って真宗に帰依されたお方であり、また香樹院徳龍師を非常に敬われた方であつた。私は生前の山本師には二度ほど東本願寺同朋会館でお会いした。印象に残る有難いお方であつた。

山本師へのお便りの中で多田先生が、  
「へたのめ救わん」の仰せを聞きそこねて、あるいはへたの

## 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日(土) 午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇師

\* なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

「へたのめ信ぜよ」のお心、これが容易に領解することができません。たのめ、信ぜよ、の本命をうけた相はどんな心であろうか、いかに心得ば頂かれたといわれるか、これが容易にぬけがたき計度であります。私自ら之に永く悩まされました。

大正三年、夏、初めて、称我名字の招喚(しょうかん)をおうけいたしました。私は其を忘れることはできません。  
と仰せられている。ここに先生ご自身がどこで救われたかという、その核心が非常に良く表されている。

真宗の聞法は、次第に聞法を重ねていくと、要するに「本願を信じる一つで助かる」「弥陀の仰せをたのむ一つである」あるいは「思いを超えた身の事実に帰れ」などという話になり、ここに焦点が定まってくる。

そうすると当然、「信じなければならぬ、信ぜよ」  
「弥陀をたのまなければならぬ。たのめばよい」「身の事実に帰らなければならぬ、帰ればよい」という処が問題になるのである。  
ところがこの問題をなんとかしなければならぬと、いつまでもそこに縛りつけられるのである。

これに対し、多田先生は「これが容易にぬけがたいはからい」だと仰せられるのである。いわゆる自力執心である。「どうすれば信じられるか」「どう

すれば弥陀をたのめれるか」  
「どうすれば身の事実に帰れるか」という、いわゆる「どうかになりたい」「どうかになれる」という自力の執心に「くくられて」、そこをグルグルまわり続ける。

先生は「私は自ら之に永く悩まされました」と告白しておられる。

聞法を重ねていくと、この問題にかならずといっているほどぶつかるのである。

多田先生はこの問題にぶつかられて、窮地に陥られたのである。しかし、そこで新たな転換が起こった。

そこを後に『私は是の如く動転せり』の一文に詳しく述べておられる。

「私は遂に祈った。祈っても、何のしるしも見えぬ。私は思案に尽きて、身動きも出来ぬようになった。ある時は、ケイレンが起こって、身に震動をおぼえて来ました。私は気が狂うようになるのかなとも思った」

とまで仰っている。そして、  
「然るに、二十七日（大正三年六月）の朝でありました。私はまた同じような苦につきあたっておった時に、ふと、（我

名を称えよ」との仰せに気がつきました。（我名を称えよ）、この仰せを私は常に聞いておったではないか、また他にも伝えておったではないか、と念い浮かべた時に、お称名が口に現れました。私の胸を鎖しておった暗黒の扉は、影もないようになくなってしまいました」

と、（称我名字）の招喚に気がつき、道が開け、アミダ仏の救いにあわれたのである。

称我名字の招喚とは（我名を称えよ）の仰せである。その仰せについて先生は続けて、

「私は今ここに（おおせ）といいました。（おおせ）とは（こ）とば）であります。私はこの時この（おおせ）を念い浮かべました。平生、聞きもし語りもしておったこの仰せを、初めての様に念い浮かべました。只この（おおせ）で、私は安んぜられました。私の究極の苦痛は、（いかにしようか）という外はありませんだ。信ずることもできぬ。すがることでもできぬ。信じてもすがっても、拜んでも称えても、三世十方の法界より見れば、浜の一粒の砂にも足らぬこの私の念いに何の価があるう」と仰せになり、自分の苦痛は

（いかにしようか）の外に無かったと申されている。これは人生百般、人が何かを突き詰めていけば、この苦しみにぶつかる。この苦しみは人間が少なくとも（生のまこと）を求むればぶつかる苦悩である。これに対して、先生はさらに、

「称うると言うことは、言うまでもなく、救いの条件ではありません。称うること、その事がすなわち助かることでありました。（私はいかにしたらば善いか）という処に聞こえて下さった（唯称えよ）（おおせ）は、私の全分を引受けて下さる（おおせ）でありました。（称えよ）とは助けて下さることでありました。称えて救われるのではなくて、称えた時、救いの門は我が前に開いていました。（いかにしようか）という苦は、今はありませぬ」

ここに、真宗の救いの原点が極めて体験的に明白に述べられていて、あたかも法然聖人が四十三歳の時、比叡山青竜寺の報恩蔵の中で、善導大師の観経疏を何度もひもとかれて、ついに（称我名号 下

至十声）の念仏往生の願に出遇われて救われた体験と軌を一にした尊い告白である。この道はまさに、親鸞聖人が八十才を過ぎてキツパリと語られた、  
「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、と善き人（法然）の仰せをかぶりて信ずるほかに別に子細なきなり」というご自身の信仰告白にも明瞭に表れている。

「私はいったいどうしたらいいのか」という苦悩に（我が名を称えよ）との仰せは、「私の全分を引き受けて下さる」限りないアミダ仏の大悲の仰せである。

「浅きは深きなり」で、いかに「我が名を称えよ」の一句は単純極まる言葉であるが、ここにアミダ仏の大慈大悲のきわまりなきお心が表されている。

「我が名を称えよ」の仰せは、アミダ仏の絶対的な大悲の仰せであって、誓願不思議といわれている。真実そのものから現れた不可思議な仰せであり、絶対的な仰せである。ということは、この仰せは人間の側から、計ることの出

来ないお助けの言葉であって、私共の方から、（なぜ）（どうして）と問うても、その訳を思いはかることはできない。いつまでも、（なぜ）（どうして）と自分の知性で納得しようとするかぎりには、アミダ仏の大悲をいただくことはできない。

「我が名を称えよ」の仰せは、「どうすることもできぬ」という苦悩のところ、ただただ余りにも有難いので「ナムアミダブツ」と従うばかりである。アミダ仏の仰せに従うことが、そのままアミダ仏にお任せすることになっていくのである。

お任せするということは阿弥陀仏と離れない身になるのであるから、そこに救いが成立するのである。それが摂取不捨の利益である。

こうして量りないのちであるアミダ仏と離れない、アミダ仏に生かされている我が身を知ることにもなっていく。アミダ仏が私の主体であることが知らされてくるようになっていくのである。

# 南無不可思議光仏

(和讃問答)

南無不可思議光仏

饒王仏のみことにて

十方浄土のなかよりぞ  
本願選択摂取する

(浄土和讃)

現代語意識（本来仏であった南無不可思議光仏、すなわち阿弥陀仏が、衆生を救うために法蔵菩薩となり、饒王仏のみもとで、十方の数限りないほどの浄土の中から、勝れた点を選び取り、劣った点を簡び捨てて、諸仏に超え勝れた本願をうち建てられた）

\* \*

N「南無不可思議光仏」とは

D「南無阿弥陀仏のことです」

N「なぜアミダ仏のことを不可思議光仏といわれるのですか」

D「不可思議光仏とは、人間の思い計らいを超えた衆生救済の働きを表現された名だからです。それゆえアミダ仏の救済の言葉はただこれを計らわなく、仰せのままに聞くばかりで、そこに救いがあると

いうお心がこもっています」

N「饒王仏のみことにて」とは

D「饒王仏とは無量寿経に説かれていた世自在王仏のことです。その説法を（みこと）といい、その仏のご説法を法蔵菩薩はお聞きになって、という意味です」

N「法蔵菩薩はアミダ仏が衆生のために、菩薩の位に降りて、一切衆生を救おうとの願を起し、私たちに代わって永い御修行をされて、現在アミダ仏となつてはたらきかけて下さっていると、お聞きしています」

D「ええそうですね。その誓願は一切衆生に本当の安らぎを与えたいと願い、清浄真実の浄らかな世界を仕上げ、その浄土に生まれさせることによつて衆生をまことの仏にしたいと願われたのです。そしてその仏国はどのような領域であればよいか、どうぞ説いて下さい」と法蔵菩薩は饒王仏に願われて、願いに応じて

説かれたのが、ここである（饒王仏のみこと）なのです」

N「その饒王仏の説法は、十方にまします限りなきほどの仏国の姿、またそこに在る者の姿をお説きになられたのですね」

D「ええ、この上なき浄土を打ち立てて、そこに衆生を生まれさせたいと法蔵菩薩は願った、善きものを選び取り、悪しきものを簡び捨て、浄らかなものを選び、穢きものを簡び捨て、この上なき浄土に仕上げようと願ひ立たれました。またその浄土に一切衆生を生まれさせることのできる因を選び取られたのです。そしてご自身ばかりのご修行によつて願ひの通りに仕上げられたのです。それが極楽浄土であり、南無阿弥陀仏であります」

N「そのことをここで（本願選択摂取する）といわれたのですね。ではその浄土はどういう浄土でしょうか」

D「法蔵菩薩が仕上げられた浄土はどういう内容の浄土であるかは仏説無量寿経に説かれています」

N「無量寿経では、たとえば四十八願の中の第一願では、たとえ我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。」

とありますが、これはどういう浄土を実現しようと願われたのでしょうか」

D「仕上げる浄土には地獄や餓鬼や畜生がない国にしたとの願ひです。地獄の苦も餓鬼の苦も畜生の苦もない、やすらかな世界にしたいという願ひです」

N「次の第二願では、たとえ我、仏を得んに、国の中の人天、寿終わりての後、また三悪道に更らば、正覚を取らじ。」

とありますね。これはどういう内容ですか」

D「ええこれはアミダ仏の浄土に一度生まれた者がまた地獄とか餓鬼とか畜生などの三悪道の苦の領域に戻ることはないようにしたいとの願ひです。こうして法蔵菩薩は四十八通りの誓願を起こされたのです」

N「そうすると（選択摂取する）というのは？」

D「地獄や餓鬼や畜生のいるような苦しみの世界を簡び捨て、そういう苦しみのない安らかな世界であることを選ぶ

ということですし、浄土に生まれた衆生がまた三悪道にかえるような浄土は簡び捨て、三悪道にかえらない浄土を選び取る、というように。他にも、ご自身がどういふ仏になりたいかを選ばれ、一切衆生をアミダの浄土に生まれることのできる行を選び取り、一切衆生が生まれることのできない行は簡び捨てられた、ということもあります」

N「そしてそれを実現するために永いご修行をされて、現在これらの願ひは成就して願ひ通りにはたらいっておられるのですね。ではそういうことはどうして分かるのですか」

D「覚りを此の世で成就された釈迦如来様が説かれた仏説無量寿経に示されています」

(了)

## 信心夜話

しばしば質問されるのですが、「どうしたら信心が得られるのですか」と。

「どうしたら」という問い自体が、まだ自分がどうかしたら信心が得られるように思っているのです。そこにある

# お便り

(T・K様の便り)

のはなお助かる身になって助かるう、助けていただこうと思つているのです。よく考え、よく理解し、もう少しハッキリしていけばいつかはハッキリすると思つていますが、それはいまだに自分がなんとかなると思つているのです。

そういう自己信頼があるので、「まるまる引き受ける」というアマダ仏の仰せが通らないのです。「助からぬ者をタスケル」との仰せです。そのどうにもならないものだからこそ、「助けさせてくれよ」と南無阿弥陀仏とまでなつて、喚びかけて下さるのが口に出て下さる救い主のアミダ仏です。

この仰せは聞くより外にはない。私たちは仰せを聞いているようで聞いていない。聞くとは聞き心に用事はない。聞いてどう受け取ったかに用事はない。

ただ「聞く」のです。称える念仏の声に就いて「仰せ」を、自分の考えを差し置いて、聞くのです。アマダ仏はお念仏の声になって私たちにであいたまい、喚びかけて下さつて居るのです。「ここに居る」「引き受ける」「助ける」と。このアマダ仏の仰せを仰ぐだけ。声を聞くだけ。

(了)

先生からお話を聞かせて頂くようになってから、二年半くらいのはずなのですが、南無不可思議光如来のことを直接伺つたのは、昨日が初めてではないかと思ひます。

如来の無碍性(障碍不可)

を示すときは無碍光如来、絶対性(不可思議)を示すときは、不可思議光如来と讃えておられると伺い、そのような違いがあるのかと思ひました。分別思議が到底及ばない。

なぜ南無阿弥陀仏を信受する一念に往生が決定するのか、全く分からない。しかし、諸佛善知識がお勧め下さる如来の仰せに従い、ただ念佛を聞く。

そのことが如来に帰命することに仕上げられていることは、驚嘆すべきことであり、全く理解できない不可思議なことでもあります。

また凡夫の悪業煩惱、身口意の三業も全く障りとせず、そ

のまま貫き至り届いて下さり、衆生に信心が発起せしめられるのは、全く無碍光のおはたらきの賜物でありましょう。全く障りにならない、如来のほうからいえば、問題にならないのであります。

よくぞここまで仕上げられた本願のお力だと思ひます。(わが名を称えるばかりで助ける、汝を往生させずば、我佛に成らじ)、とまで仰つて下さつた大悲、誠に有難く存じます。

念佛して助かるのではなく、(一声称えるばかりで助ける)、とまで仰つて下さる、その底知れぬ大悲に助けられて往生させて頂くのである、と聞かせて頂いております。

名となり、声となり、智慧の念佛、信心の智慧が師となつて導いて下さる、これが念佛往生の相なのではと思つています。

そうすると、やはり信前信後問わず、念佛を聞く、聞名の一行をたもつ、(無量寿佛の御名をたもつ)、という仰せは念佛を申しつつ、聞けよのお勧めであり、このお勧めによりかかるばかりであります。

今はただ、土井先生や諸佛善知識のお勧めに従い、ただ南

無阿弥陀仏南無阿弥陀仏とお念佛を聞かせて頂くばかりで、十分なのであります。

また念佛往生の奥義をお聞かせ頂きたく存じます。合掌

追伸

『法味寸言』では、九頁に「何事によらず、最後は如来がお引き受けくださる、力一杯やることだ」

の仰せが有難く思ひました。如来が手放して下さらない、これほど頼もしいことはあり

ません。如来がタスケルと仰るのであれば最早それに打ち負かせるばかりであります。

(了)



## 〈お知らせ〉

毎月二日に行つておりました念仏座談会は今年かぎりといたします。来年からは毎月二日の念仏座談会はございませんのでご注意下さい。なお、毎月十二日の座談会は従来通り行います。

## 〈お知らせ〉

以前ラジオ(NHK)で放送しました木村無相さんのことについての住職の話が再放送されますのでお伝えいたします。

十一月二十五日(日)NHK「こころの時代」午前八時半から九時まで。